

■東北アジア体育・スポーツ史学会日本支部報■

第 26 号 2026 年 6 月 16 日発行

東北アジア体育・スポーツ史学会日本支部事務局
〒060-0811 北海道札幌市北区北 11 条西 7 丁目
北海道大学大学院教育学研究院 崎田嘉寛研究室内
jimuj@neashpes.org

〈目次〉

- I. 東北アジア体育・スポーツ史学会第 14 回大会の報告
- II. 東北アジア体育・スポーツ史学会総会（2025 年度まで）報告
- III. 東北アジア体育・スポーツ史学会第 14 回大会における学会賞（優秀発表賞）の選考結果報告
- IV. 学会機関誌に関するお知らせ
- V. 年会費納入のお願い
- VI. 東北アジア体育・スポーツ史学会第 14 回大会参加記

I. 東北アジア体育・スポーツ史学会第 14 回大会の報告

東北アジア体育・スポーツ史学会第 14 回大会は、2025 年 8 月 4 日（月）から 7 日（木）まで、ソウル教育大学において開催されました。一般研究発表 56 演題、ポスター研究発表 12 演題、学会企画が実施されました。学会企画では、新井 博会員（日本福祉大学）による基調講演がありました。

（日本支部からの参加者：14 名）

以下、学会大会における日本支部からの発表者と演題を報告します。

〔一般研究発表〕（順不同）

- 1) 「有明テニスミュージアム」設置の意義と課題
後藤光将（明治大学）
- 2) The acceptance and transmission of Olympism in France: From the application for inscription of the "Olympic Spirit" on the French Intangible Cultural Heritage List (2019)
和田浩一（神戸医療未来大学）
- 3) 18 世紀後期から 19 世紀初頭のイギリスの遊戯書にみるホッケー
秋元 忍（神戸大学）
- 4) 1900-1930 年代の日本における女子への集団スポーツ奨励について
藤坂由美子（東京女子体育大学）
- 5) 日本泳法における「およぎ」の歴史性に関する予備的研究
○崎田嘉寛（北海道大学）、胡 泰志（比治山大学）、松岡千映（神伝流広島游泳同志会）、
近藤雄大（津山工業高等専門学校）、苫米地里香（札幌国際大学）、孫 暢（北海道大学）

大学院)

- 6) 走動作の発展史：第24回オリンピック競技大会・陸上男子100m走におけるベン・ジョンソンから考える
○苫米地里香（札幌国際大学）、近藤雄大（津山工業高等専門学校）、崎田嘉寛（北海道大学）
- 7) 1950-70年代北海道（帯広市）の体育科におけるスケート教材の学習内容に関する研究
○孫 暢（北海道大学大学院）、苫米地里香（札幌国際大学）、崎田嘉寛（北海道大学）
- 8) 体育科成立期（1947-1952年）における教育内容の地域化に関する一考察：北海道版「学習指導要領」を事例として
○宮下悠暉（北海道大学大学院）、近藤雄大（津山工業高等専門学校）、苫米地里香（札幌国際大学）、孫 暢（北海道大学大学院）、崎田嘉寛（北海道大学）
- 9) 太平洋戦争期（1941-1945）日本における陸上競技の「戦技」化構想とその実態について
高見哉多（神戸大学大学院）
- 10) 日本の卓球競技における攻撃的打法の採用過程に関する研究（1902-1942）
木村直登（神戸大学大学院）
- 11) 21世紀の在日朝鮮人のスポーツ活動について—在日本朝鮮人体育連合会とその活動を中心に—

金 世正（元朝鮮大学校）

〔学会企画〕（基調講演）

演題：東北アジア体育・スポーツ史学会の永続的開催のために

演者：新井 博（日本福祉大学）

II. 東北アジア体育・スポーツ史学会総会（2025年度まで）報告

東北アジア体育・スポーツ史学会総会を大会期間中（8月4日から7日まで）に、メール（書面）にて実施しました。2019年8月から2025年7月までの東北アジア体育・スポーツ史学会日本支部会計報告（案）が審議され、承認されました。また、2025年8月-2027年7月の日本支部の役員選挙結果が報告され、承認されました。役員は以下の通りです。

〔2025年8月-2027年7月 日本支部学会役員〕

新井 博（会長）
藤坂由美子（副会長・会計担当）
秋元 忍（副会長・機関誌担当）
崎田嘉寛（日本支部事務局）
後藤光将（HP担当）
大林太朗（HP担当）
榎本雅之（会員情報管理担当）
寶學淳郎（機関誌担当）

和田浩一 (選挙担当)
都筑 真 (会計担当)
田端真弓 (会報作成・発行担当)
掛水通子 (監事)
真田 久 (監事)

Ⅲ. 東北アジア体育・スポーツ史学会第14回大会における学会賞(優秀発表賞)の選考結果報告

※対象：東北アジア体育・スポーツ史学会第14回大会における一般研究発表

以下、3件の一般研究発表者が受賞しました。

「走動作の発展史：第24回オリンピック競技大会・陸上男子100m走におけるベン・ジョンソンから考える」

○苫米地里香(札幌国際大学)、近藤雄大(津山工業高等専門学校)、崎田嘉寛(北海道大学)

「1950-70年代北海道(帯広市)の体育科におけるスケート教材の学習内容に関する研究」

○孫 暢(北海道大学大学院)、苫米地里香(札幌国際大学)、崎田嘉寛(北海道大学)

「日本の卓球競技における攻撃的打法の採用過程に関する研究(1902-1942)」

木村直登(神戸大学大学院)

Ⅳ. 学会機関誌に関するお知らせ

現在、理事会において、『東北アジア体育・スポーツ史研究』の継続刊行の有無、国際電子ジャーナルの発行・統合、これらに関する各国との調整などを含めて検討中です。

Ⅴ. 年会費納入のお願い

これまで停止しておりました年会費について、2026年度より2,000円を申し受けます。本会費は、日本支部事務局および学会大会の運営に充てる、日本支部独自の会費です。

郵便振替口座 加入者名： 東北アジア体育・スポーツ史学会日本支部 口座番号： 00180-9-553243
--

Ⅵ. 東北アジア体育・スポーツ史学会第14回大会参加記

第14回大会に参加されました近藤雄大先生より大会参加記のご報告をいただきました。会員の皆様にご紹介いたします。

近藤雄大(津山工業高等専門学校・北海道大学大学院)

2025年8月4日(月)から7日(木)にかけて、韓国・ソウル教育大学で開催された東北アジア体育・スポーツ史学会第14回大会に参加しましたので、そのご報告をいたします。

私は現在、北海道大学博士後期課程2年に在籍しており、国際学会への参加は今回が初めてでした。また、一人で海外へ渡航すること自体が初めてであったため、パスポートを紛失したらどうしよう、入国審査では何と答えればよいのか、現地の会場で知り合いが誰もいなかったらどうしよう……など、多くの不安を抱えての出発となりました。しかし、実際に参加してみると、国内の学会でお世話になっている日本人研究者の方々とも再会でき、不安はすぐに解消され、非常に充実した学会参加となりました。

国際学会への参加にあたって、最も大きな不安のひとつが「言語」でした。英語でのコミュニケーションはもちろん、韓国語の案内や現地でのやり取りにも対応できるのか自信がありませんでした。実際に会場に足を運ぶと、セッションではAIを活用した同時通訳ソフトが導入されており、発表や議論の内容を各参加者が本国語で理解できるよう配慮されていました。初めは緊張しましたが、同じ分野の研究テーマであることもあり、徐々に発表内容の全体像がつかめ、質疑応答にも耳を傾ける余裕が生まれました。また、受付や運営スタッフの方々が多言語対応に慣れており、参加者へのサポートも丁寧で、言語の壁が思っていたほど高いものではないことを実感しました。

私は発表を行わず、すべての時間を聴講に充てました。セッションでは、日本、韓国、中国、台湾における体育・スポーツ史の多様な研究が紹介され、各国の研究者によって活発な議論が行われていました。今回は一般研究発表56演題、ポスター研究発表12演題が実施され、研究の広がり各国の関心の違いを実感することができました。特に印象に残ったのは、同じ歴史的事象を扱う研究であっても、国や研究者によって重視する視点が異なる点です。資料の種類や解釈の違いが議論に反映され、私自身の視野が広がると同時に、「自分の研究は国際的に見たときどの位置にあるのだろう」と考えるきっかけにもなりました。

また、休憩時間や情報交換会では研究者同士の交流が盛んで、私も日本人の先生方から研究の進め方や博士課程での過ごし方など、さまざまなアドバイスをいただきました。発表しない立場であっても、多くの学びを得られることを強く実感しました。

今回の国際学会への参加は、私の研究者としての姿勢を大きく見直す機会となりました。特に感じたのは、「参加すること自体に大きな価値がある」ということです。発表を伴わない参加であっても、国際的な研究動向に触れることは、自分の研究を見つめ直す良い刺激となり、日常の研究を新たな視点から考える助けになりました。また、事前に抱えていた不安の多くは、実際に行動してみると大したことのないものだ気づきました。今後は語学力の向上に努めるとともに、次回はぜひ自らの研究成果を発表できるよう準備を進めていきたいと考えています。

今回得た経験を糧にし、国際的な視野を持った研究者として成長できるよう、今後も努力を続けていきたいと思っております。

以上